

一つのケースワークとして、たいへん効果的であったといえる。

第3部は、近代化した政体と題され、1932年以降の政治を特徴づける。タイ固有のグループ・ダイナミクスがきわめて実証的な手法で解説されている。ウィルスンのいわゆる“カナ”の理論を少し修正したうえで、そのいろいろなケースを検討しているが、現代タイ国政治を分析する一つの試みとしては、これまでの最高水準を行くものとして、高く評価されねばならない。

本書は、タイ・プロパーの専門家にとっても、また、比較政治学者や近代化理論の研究者にとっても、示唆するところを無数に含んでいる。また、本書は、タマサートの若手学者にささげられているが、リッグスがタイ国での human relations をフルに活用して、本書の肉付けをより効果的にしたことがわかる。そのことは、もっぱら英語文献に頼りながらも、本書の随所に、英語文献だけでは得られるはずがない洞察やデータが散らばっていることから知られる。本書の執筆過程では、十全な実証主義に徹しようとする心掛けが貫かれたに違いない。

それにもかかわらず、本書には一つの大きな欠点がある。それは、事実認識に誤りが多い、ということだ。特に第3部のグループ・ダイナミクスの敘述の個所はあまり感心できない。たとえば、1932年革命後の派閥斗争についての個所は、くわしいわりに、かなり事実と反している。この欠点は、政治家一人一人のパーソナリティにまでおよぶ帰納的な研究を抜きにして、単に表面的な結果だけから、集団の離合集散を *ex post* に脈絡づけようとしたことから生じたのだ。プレイヤー・パホンやプレイヤー・ソンらの政治的性格についての本書の説明を、納得するタイ人がいるだろうか。タイ国を描いた一切の英語文献のおそるべき限界を認識しないところに、タイ学の進歩はありえない、といっっては過言であろうか。

これらの限界を十分わきまえた上で読むかぎり、こんな面白い本はない。少なくとも、リッグス教授の構想の雄大さは、読者を圧倒することだろう。タイ国研究は、ウィルスンの *Politics in Thailand* に加えてさらに一冊のすぐれたガイドブックを得たのだ。

(矢野 暢)

山本登編著『東南アジア開発と二重構造』
東京：1966. 222p.

東南アジア経済のひとつの基本的特徴は、その二重構造、すなわち近代産業部門対伝統的産業部門、輸出商品生産部門対国内自給生産部門、貨幣経済部門対非自給自足部門、農業部門対非農業部門、あるいは外国資本部門対土着資本部門などの対立構造にみいだされる。

この二重構造は経済開発戦略をきわめて複雑なものにする。それは経済発展の阻止的要因となることが多いとともに、経済発展にともなって二重構造がより強くなることも多い。そのため、所得の階級間、産業部門間、あるいは地域間の較差がひろまり、国内の政治的不安の一因ともなる。

この基本的な問題について、慶応義塾大学山本登教授を中心とするグループが6年間にわたっての研究をすすめられた。この成果が本書である。

この共同研究で東南アジアといわれている地域は、かならずしも厳密ではないが、山本教授の巻頭論文では、「ECAFE へのアジアの加盟国を指す。ただし、イランは除く」とある。したがって、わが国で従来採用されていた広義の東南アジアを意味し、Southeast Asia を指していないようだ。

本書はつぎの諸論文からなりたっている。

- 山本登：東南アジア経済開発の未来像
- 大山道広：低開発経済の構造と発展
- 矢内原勝：低開発諸国の二重経済構造の成立
- 田中拓男：東南アジアの二重経済構造
- 大西昭：二重経済構造と経済開発
- 深海博明：二重経済構造と外国貿易
- 田村茂：資本蓄積とインフレーション
- 佐々波楊子：東南アジア諸国の資本形成の動向
- 川田寿：二重経済構造と労使関係

したがって、理論的分析と実証的分析との両側面からの、それぞれ独立的な論文の収録といった感じが強い。いいかえると、個々の論文は、それ自体きわめて興味深い、はたして全体として二重構造が経済開発に及ぼす影響をおよぼすかについての総括的把握に弱い感じがある。しかし、この大きな問題の接近として、わが国における東南アジア経済研究の、きわだった業績である。

(本岡 武)